

「御遠忌テーマ」学習会講義録 不遠寺住職 四衢 亮師 口述

開催日時…2015年10月22日 午後1時半から

参加対象…御遠忌推進委員会法要教化部会委員

御遠忌テーマパンフレットより

宗門では、2005年、宗祖御遠忌のお待ち受け大会において、御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」を発表しました。それにあわせて、各教区でもそれぞれテーマを発信していくということで、高山教区では、「雑行を棄てて本願に帰す」このままでいいのか、今の世・この私」をテーマとして、2008年10月、お待ち受け大会を開催しました。そして、今般、御遠忌に向けて再出發するということで、あらためてこの「御遠忌テーマ」について問題提起をさせていただくこととなりました。

それで、「雑行を棄てて本願に帰す」という、親鸞聖人ご自身が真宗の教えに出遇われて表現されたこの言葉と、その後続く「このままでいいのか、今の世・この私」という問題性と「どこでどう切り結ぶのか」といことが今ひとつはつきりしていないということをお聞きして、今日は、その辺りのことを中心に考えてまいりたいと思います。このたびの御遠忌テーマに寄せた文章として、パンフレットにはこのような記載をいたしました。

こうした現代日本を生きる私たちに、親鸞聖人は、私たちが「正しい」と信じて行ってきたことの、その全てが「雑行」ではない

かと教えられます。そして、「雑行」と知るはたらきが「如来の本願」なのです。人類の歴史の上にたえず繰り返されてきた、止むことのない闘争・戦争・差別・いじめ・・・、それらは決して私たちと無関係ではなく、この私のあり方が生み出すのです。この自覚を私たちにうながすはたらきが本願であり、その呼びかけに気づくことが本願との出遇いなのでしょう。

この「雑行」という言葉を押さえる時、私たちが正しいと信じ行ってきたこと、我々が当然と思い、そしてある意味では常識としてしまっていること、そういう我々の方向性というか、考え方と言ってもいいかも知れませんが、そういう方々には、実は「雑行」という大きな問題をはらんでいるのだと。そのことの問題性をむしろ呼び覚ましてくるのが「本願」なのだ。「雑行を棄てて本願に帰す」という言葉の中には、私たちの今を問い、そして私たちのつくっているこの時代を問うということの意味があるのではないかということが、このパンフレットに流れているものであったと、私としては、再確認していければと思っています。

本願に帰すということがそのまま雑行を棄てること

親鸞聖人は、ご自身の法然上人との出遇いを、「建仁辛の酉の暦」と明確にその時を記しながら「雑行を棄てて本願に帰す」とおっしゃられています。言うならば、これは「回心」ということになります。それで、「棄てて」「帰す」ということについて、親鸞聖人が他のところどどのように表現されているかというところ、『唯信鈔文意』では、

本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを「唯信」という。

（『唯信鈔文意』聖典547頁）

「回心」というのは、自力の心をひるがえし、すつるをいうなり。

〔唯信鈔文意〕 聖典552頁)

とこうことで「回心」という言葉をおっしゃっています。また『歎異抄』第十六章では、

回心ということ、ただひとたびあるべし。その回心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのこころにては、往生かなうべからずとおもいて、もとのこころをひきかえて、本願をたのみまいらするをこそ、回心とはもうしそうらえ。

〔歎異抄〕第十六章 聖典637頁)

とあらされ、回心ということについて、「日ごろのこころ」では我々は救われぬのだということを確認し、それを「ひきかえ」て本願をたのむということが回心なのだと言われています。

『唯信鈔文意』の言い方を見ますと、「本願他力をたのみて自力をはなれたる」と、あるいは、回心については「自力のこころをひるがえす」、また『歎異抄』第十六章では、「もとのこころをひきかえて」とありまして、「雑行を棄てて本願に帰す」という言葉は、「雑行を棄ててそれから本願に帰すのだ」という、段階的なあるいは時間差があるようなことではなく、むしろ『唯信鈔文意』の言い方をすると、「他力をたのむということが自力をはなれる」ということである。そして、「自力のこころをすてる」ということが他力をたのむ」ということであるという言い方、あるいは第十六章もそうになっておりますから、「雑行を棄てて本願に帰す」というのは、「本願に帰す」ということが必然的に雑行を棄てるということ」になっていると、そういう形で確認を

されていると思います。

「本願に帰すということがそのまま雑行を棄てること」だと、「雑行を棄てて、それからしばらくして本願に帰すことになった」ということではないんだという点が、非常に大事なことだと思っています。

自力と他力

それで、さらに大事なこととして、「帰す」ということについてもそうなんですけれども、親鸞聖人は「自力」ということと「他力」ということの中で、自らの「回心」という内容を確認されていらつしやいます。そのような視点で、あらため「自力」ということを確認しますと、『血脈文集』では、

まず、自力と申すことは、行者のおのおのの縁にしたがいて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わが身をたのみ、わがはからいのこころをもって、身・口・意のみだれごころをつくるい、めでとうしなして、浄土へ往生せんとおもうを、自力と申すなり。

〔親鸞聖人血脈文集〕 聖典594頁)

とあります。我が身、我がはからいのこころをたのむことによって自分の身口意の乱れを整えていくと、そういう方向性というか発想が自力だと言われています。そして、そういうことが「日ごろのこころ」だと、『歎異抄』では押さえられていると思います。

あるいは、『唯信鈔文意』では、「自力をすてる」ということについて更に言及されており、

自力のこころをすつというは、ようよう、さまさまの、大小聖

人、善悪凡夫の、みずからが身をよしとおもうところをすて、みをたのまず、あしきところをかえりみず、ひとすじに、愚縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。

〔唯信鈔文意〕聖典552頁

とあります。すてるべき「自力」のところというのは、「みずからが身をよしとおもうところ」であり、「身をたのみ」、そして「悪しきところをかえりみず」だと。「こんな自分はダメな自分だ!」とか「あんなことをしてはいけないのだった!」という形で、自分で自分をすてていくような思い、それも「自力」だと、そういう言い方もされています。『一念多念文意』では、

自力というは、わがみをたのみ、わがところをたのみ、わがちからをばげみ、わがさまざまな善根をたのみひとりなり。

〔一念多念文意〕聖典541頁

とあり、こういう「自力」ということが実は、「雑行」という言葉のもとにあるんだろうと思います。置き換えて言えば、「雑行を棄てて」の「雑行」というのは、「自力のふるまい」ということになるかと思えます。

よく「自力と他力」とうことについて、例えば、「自分で動かそうと意識しないのに心臓は動いている。あるいは胃や腸の消化器や、腎臓などの循環器も、何もこちらが意識していないけれども、全力で私たちを生かしている」と、こういう言い方がされる場合があります。こういうことが他力ということではないだろうか、喩えとしても言われたりもしますが、確かに私たちは、自分で意識しないさま

ざまなことに支えられて生かされているという言い方はできませんけれども、これは体の仕組みからいえば「自律神経」ということですか、自律神経が「他力」という意味ではありません。

また、陽の光や田畑を潤す水や空気とか、大自然の恵みというようなものも、我々の力を超えたもので、「大いなる力」として「他力」ではないかと。確かに、本山の高廊下に掲示してある法語ポスターでは、「他力」という言葉の翻訳では「Power of beyond myself」という、自分自身の力を超えているという言い方を使っていますから、そういうふうなニュアンスでとらえられるのかも知れません。体が動くについても食べるについても、さまざまな関係や深いつながりの中で私たちは生きているんだ、そういう意味で生かされているというような表現をし、感謝の心が大事だという言い方もされますけれども、その「生かされている」という人間が、この教区御遠忌テーマパンフレットにもあるように、核兵器をつくり、戦争と殺戮を繰り返し、難民を生み出しているわけです。そして、その原因には、人間がつくり出した差別と格差、そういうものが歴史的に深く横たわっているというのもまた事実です。ですから、「生かされている」ということに気づけば、人間がそれをしなくなるのかといえ、そういうことではないはずです。

雑行 人間の事実から目をそらしていく

親鸞聖人は、「人間は生かされているから、そのことに気がつければ、感謝の心が生まれ、身と心が整って麗しい存在となっていく」などということはおっしゃられています。私たちの身と心が整って麗しくなっていくということは、我が身と我が心をたのみということだと。「さるべき業縁のもよおさばいかなるふるまいもすべし」というように、さまざまな条件と原因によって人間は何でもしてしまうし、どん

なことでも行ってきたはずではないかと。自己関心にふける、煩惱とそれに伴う罪悪深き身であるということに間違いないのではないかと
と言われるのです。

ですから、人間の事実から目をそらしてはならないのだと。「雑行」とは、どこかで人間の事実から目をそらし、そして何かどこかで自分は麗しい、自己肯定的なものになっていけるのではないかと発想していく、そういうものを「雑行」と言うのでしょうか、そのもとにあるものが「自力」であると親鸞聖人はおっしゃられていると思います。親鸞聖人は「雑行」について『化身土巻』で、ちよつと長かったので省いておりますけれども、

経家に抛りて師積を披くに、雑行の中の雑行雑心・雑行専心・専行雑心なり。また正行の中の専修専心・専修雑心・雑修雑心は、これみな辺地・胎宮・懈慢界の業因なり。かるがゆえに極楽に生まるといへども、三宝を見たてまつらず、仏心の光明、余の雑業の行者を照摂せざるなり。仮令の誓願、良に由あるかな。仮門の教、欣慕の積、これいよいよ明らかなり。

（『化身土巻』聖典343頁）

とあり、「雑行」ということにはどんな問題をはらんでいるのかというと、これは「仏智疑惑」ということをはらみ、結局、自分自身の自己満足の中に生まれてしまうということであると言われています。

この「仏智疑惑」について、これは「辺地」とか「懈慢」とか、あるいは「疑城胎宮」とか、また500年の快樂の中に浸るとか言われていますが、特に、「含花未出」（聖典506頁）の人だとも言われます。極楽の蓮の花の上に生まれるのだけれどもその花は「つぼみ」で500年間その中に閉じこめられている。それは他の言い方をします

と「七宝」、まさに宝の山であり心地よい場所です。それこそ自分だけありがたくなつて、そして「おかげさまで」といって、そして「感謝申しあげられる身になった」と、「ありがたいことや」というかたちで自己満足の世界に浸るわけです。それは非常に気持ちのいいことで快適だと。

しかしそれは、「三宝」を見ないのだと言われています。「三宝」を見ないということは、「教えから問われることがない」ということです。自己満足の自己が決して破られることがない方が「含花未出」でしょうか、「疑城胎宮」ですね。そういうものを目指し、そういうものになっていってしまう、これが実は我々の「自力」という問題であり「日ごろのこころ」なのです。我々の常識の中では、やはり、私の身を整え、私の心が善くなつて、そしてなぐさめられ落ち着きを持つて、何か特別な心境に浸つていくと、そういうものです。それはまさに、先ほどのパンフレットの言葉で言いますと、『私たちが「正しい」と信じて行つていくこと』であり、正しいと信じてしまつていきますから決して問われることがない。そういう方向をもつていってしまうものが、「雑行」ということではないかと思ひます。そのことを親鸞聖人は、善導和讃で

こころはひとつにあらねども

雑行雑修これにたり

浄土の行にあらぬをば

ひとえに雑行となづけたり（『高僧和讃』聖典495頁）

と著されています。親鸞聖人は、「雑行」とか「雑修」について、心の有り様と行の有り様について雑行雑心とか専修専心とか色々な形で細かく分けていらつしやいます。まとめて言うならば「雑行」

だと。なぜかというところ、そこで求められる救済は自己満足を超えない。決して「煩惱具足の凡夫、罪悪深重の身を持つている」というような形で自己を問うことがありませんから、快適に自分の居心地のいい心の中にあるという、そういうあり方の者を、「雑行」というふうにとめていつていらっしやるんだと思います。

そしてそれは、単に個人的なことではなく、私たちの「時代」とか「社会」というものと深く関わっているのだと言っているのかと思います。そのことを「本願に帰す」というときの、「本願」の起点となるところから確認したいと思います。

本願が開く時と場所 時代と社会

親鸞聖人が著わされた『正信偈』の冒頭の「帰命無量寿如来 南無不可思議光」の二句について、宗学では「総讚」と位置づけられます。宗祖ご自身が出会い、いただき、確認されている教えは、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」、つまり「南無阿弥陀仏」なのだ、そのことをまず総じてもって讃嘆されているということ。その「南無阿弥陀仏のいわれ」が、「法蔵菩薩因位時 在世自在王仏所」以降でうたわれているのが『正信偈』の大まかな構造です。最初に表明された「帰命無量寿如来 南無不可思議光」ということがうなづけるという時に、『正信偈』がいただけるのだと我々の先輩方は確認されています。

その「南無阿弥陀仏」ということ、本願の名号のいわれ、南無阿弥陀仏の本願の教えの起点が、「法蔵菩薩と世自在王仏の出会い」として『大経』には示されています。この出会いが、本願が開かれるのに非常に大きな内容をもっているというふうに言えると思います。それで、『大経』では、

その時に次に仏ましましき。世自在王、如来・応供・等正覚・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と名づけたてまつる。時に国王ましましき。仏の説法を聞きて心に悦予を懐き、尋ち無上正真道の意を發しき。国を棄て、王を捐て、行じて沙門と作り、号して法蔵と曰いき。高才勇哲にして、世と超異せり。

〔無量寿経〕 聖典10頁

この前には、五十三の仏さまの名前が順番に出てきます。仏教というのはキリスト教とかイスラム教とかユダヤ教のように、この地を創造した創造神というものはありません。むしろ「歴史を貫く深い願いがけや問いかけ、真実からの問いかけ」というものに気づいて目を覚ましたというところで、仏というのは次々と生み出されるのだ。そして時を得て世自在王仏という仏が誕生されていた。その世自在王仏がいらっしやった「その時」に、時を得て国王がいた。「時に、時に」とあるのは、やはり「時」というものが非常に重要なのであって、時を得なければ我々は「仏に遇う」ということがありません。二五〇〇年前のインドに私たちがいたとしてお釈迦さまに遇えるのかというと、それは分からないのです。たまたまガンジス川流域を歩いていて、お釈迦さまとすれ違ったり隣りにおられたとしても、その人が「仏陀」だと気が付かなければ、「仏陀」だと分かなければ、お釈迦さまに出遇ったとは言えないものがあります。

そして、仏の説法を聞いて心に悦予を懐いた。悦予の「予」は、「あらかじめ」と読みますから、悦予というのはあらかじめ喜んだということです。色々お話を聞いて全部うなづいてから喜んだというのではなく、「ここに本当に聞くべき教えがあった」と、聞くのは今からだけれども、ここに本当に聞くべき教えがあった。あるいはここに本

当に歩むべき道があつたと。歩むのは今からだけれども、出遇つたことにおいて、その道を歩める者になつたということ、あらかじめ喜んだというのが悦予ということ。

そして、「尋ち無上正真道の意を発しき」と。この「尋」という字は「後に続いてたずねる」という意味です。喜び勇んで自分から勝手に行くんじゃないくて、世自在王仏の後に続いてその道を尋ねる者となるということ。そしてその結果として、「国を棄て、王を捐てて、行じて沙門と作り、号して法蔵と曰いき」となります。つまり仏教との出遇いによって、国を棄て、王を捐てることになつた。この「棄」と同じ「すてる」でも、「捐」という字は意味が違います。「棄」は、「あつたことによつて棄てさせられることになつた」、「そのものによつて棄てさせられることになつた」、あるいは「託して棄てることになつた」というふとときに「棄」を使います。「棄」は、一番上の字は子どもの「子」という字が逆さまになつた字で、そしてこの形は「ちりとり」の形。これは両腕を意味しますから、「ちりとりの上に子どもを逆さまに棄せて棄てる」という象形文字です。大事にしていたものを棄てさせられることになつたと。自分で手を離すのではなくて、ちりとりの上に棄せて、託して棄てさせられるということです。ですから、国を棄てるといふことは、世自在王仏の説法を聞くことによつて棄てさせられることになつたということです。「捐」は、「必要がなくなつて捐てる」という意味です。自分の意志で捨てるということなので「手へん」が付きます。国を棄てた以上は、国がない王様というのはありませんから、王位は必然的に要らなくなつて捐てたということです。

そして、「号して法蔵と曰いき」の「号」というのは、「自ら名乗る」という時に「号」を用います。「名」の場合は、第三者から名づけられる場合に用います。これははつきりと使い分けがあります。中国の

文化ではそうです。中国では本人の名前を本名で読んでいいのは、皇帝と名付けた親だけです。他の人がその人の本名を呼ぶというのは、失礼にあたるということ、その人が「号した」あだ名を呼ぶというのが中国の文化です。ですから、「号して」と書いてありますから「法蔵」と自ら名乗つたということです。だから、本願の「名号」というのは、「阿弥陀と名づけたてまつる」と名づけられたということ、自ら名乗り出たということの両面があります。これが名号という言葉の意味になってくるかと思ひます。「法蔵」と号したということは、今まさに、世自在王仏と出遇い教えられ、歴史を貫き流れるような深い願ひかけや問ひかけが、私に至り届いたのだと。至り届いたその問ひかけや願ひかけを自らの名としますと言つて「法蔵」と名乗つたということ。この「法」はダルマ、「蔵」はアーカラです。歴史を貫き流れている真実という意味です。それに私は今ふれた。それをそのまま名前としますということ、この「法蔵」と名乗られた。そしてそれは、「高才勇哲にして、世と超異せり」と。世自在王仏もそうですけれども、「世において自在である」と。そして、「世において自在である」という話を聞いて、初めて「世を超えて世を問う」ものになつたと。世、べつたり生きていた者が、初めて世を超えたものにふれて、世を問う者になつた。今までは、世の教えと世の道理に従ひ、「より善き者」となることを発想していた者が、初めて世そのものを問う者となつたということだと思ひます。

その法蔵菩薩について、親鸞聖人は『曇摩伽菩薩文』というものを残しておられます。高田専修寺が所蔵しておりますB5サイズぐらいの小さな親鸞聖人のメモですけれども、直筆が残っています。御遠忌の時の親鸞展のクライマックスの展示のところに、ちょうど展示してあつたのでご覧になつた方もおられると思ひますけれども、こういう文章です。

曇摩伽菩薩と申すなり。娑婆世界王なり。無諍念王出家して後、法蔵比丘となづく、法處比丘とも申す。世自在王仏は御師なり。世饒王とも申す、宝蔵如来とも申す。(『曇摩伽菩薩文』)

「曇摩伽菩薩」というのは法蔵菩薩のことです。お経はインドの言葉から中国の言葉に翻訳され伝わってきましたが、幾つもの異訳の経典が生まれました。その中で、特に古い時代に訳されたものでは、法蔵菩薩という訳し方ではなく、「曇摩伽菩薩」というふうに音写した訳になっています。それに注目されてまとめられたものですが、ただ面白いのは、「娑婆世界王」だと。「時に国王ましましき」としか康僧鑑の訳では触れられていませんが、親鸞聖人はそれを「娑婆世界王」だとおさえられ、しかもその名前を「無諍念王」という名前だったというふうに確認されています。

「無諍念王」というのは『悲華経』に出てきます。これは『大経』の異訳の経典ではありませんけれども、浄土経典の一つで、有名なお経です。その中に出てくる「無諍念王」という名前の王様だということにおさえられます。娑婆世界王というのは、今まで娑婆世界を統括するものだったということです。娑婆という言葉は「saḥā」というサンスクリット語が音写された言葉ですけれども、翻訳された言葉としては「忍耐」「忍土」となります。「忍土」というのは「我慢する世界」という意味です。また、「saḥā」というのは「力づくの世界」ということです。力の強い者が力の弱い者をねじ伏せ、力の強い者が世の真ん中で幅をきかせ、そして世を牛耳っていくということです。牛耳る人より、力の前に力なくして片隅で我慢する人の方が数は圧倒的に多くなりますから、数の多さで言えば、「娑婆」というのは「忍土」だということになります。我慢する世界、我慢させられる世界、

我慢させる世界、それが人間の住む社会なのだということです。そのことを、人間がつくる世の問題として、『大経』(下巻)に五つの悪が挙げられております。その第一悪のところは、

仏の言わく、その一つの悪というは、諸天人民蠕動の類、衆悪を為らんと欲えり。みな然らざるはなし。強き者は弱きを伏す。転た相剋賊し残害殺戮して迭いに相呑噬す。

〔無量寿経〕下巻五悪段 聖典66頁

世においてあらゆる存在が悪をなそうとしてしまうと、そうならぬものはないのだとあります。何故か。力の強いものは弱いものをねじ伏せていく。だからねじ伏せられる側は、ねじ伏せられるばかりではかたまりませんから、今度は力で抑えようとすれば力は力で反発する。そして「転た」というのは、だんだん、だんだん、相戦い合い、殺しあいをして、互いに「相呑噬す」と。呑は「飲み込む」、噬は「噛みつく」という意味です。飲み込んだり噛みついていたりしながら、果てしない力を巡る争いになる。力で力を押さえつけようとすれば、力でまた反発しますから、それで「相呑噬す」というかたちで、力を巡って争い合っていく。そういうものが娑婆の姿なのだと表現されています。そういうかたちで世を司る側は、力で押さえこんで娑婆を統括し、力で娑婆をコントロールし、そしてその力を背景に娑婆の教えを立てていきます。「人間とはこうあらねばならない」、「こうあるべきだ」、「こういうふうにあるのが人間だ」、感謝の心をもって、適切な欲望と適切な倫理観をもってバランスよく生きていく。そういうかたちで自分の人生を美しいものにしていけるのだと、いきなさいと、そういう世間の教え、日ごろの常識が語られたり作られたりします。

『歎異抄』第九章で、唯円が親鸞聖人に、「念仏を申しても喜ばな

いし、浄土へ行きたいとも思わない」と問います。もちろん、唯円という方は、念仏してみたけれども「大したことないな、面白くないな」と言っているのではなくて、一度は親鸞聖人との出会いによって、「ああ、ここに本当に道があった、進むべき教えがあった」というかたちで教えに出遇って、それを深い感動と感銘をもって教えを聞いてきたわけですね。ところが、だんだん感動や喜びが色あせ薄らいでいくと、それはどうしたことかということでも聞くわけです。人間というのは、感動して喜びたいものなんです。だけど、最初に出遇ったときのような感動が、今教えを聞いても感じられないというんです。「あの時あんなに喜べたのに」と、感動を比べて今の感動が薄らいだり、色あせて感じるということがダメなんじゃないかと思うんですね。それで、自分を顧みるんです。「どうしたことでしょうか?」と。親鸞聖人は、「それは煩惱の所為だ」とおっしゃっています。つまり、浄土の教えや往生の教え、本願の教えは、人間の煩惱を喜ばしたりはしないんだと。ところが、人間の煩惱というのは、単なる「欲望」ではなく「自己拡大の関心」ですから、それこそ睡眠欲とか食欲とか性欲とかという基本的な欲望も煩惱ですけれども、そういうものが全部満足すればいいのかというと、そういうわけにはいきません。睡眠欲とか食欲とか性欲ということは、それが満たされれば満足かというと、今度はそれが得られない時の苦しみや辛さがあります。「得られなかったらどうしよう」ということもありますし、「そういうものに毎日毎日振り回されていくのはかなわん」、「できることなら煩惱に毎日毎日振り回されるのが嫌だから、煩惱を何とか減らして適切なものにした」と。大体、煩惱というのは相手があつての話ですから、自分勝手に好きなだけやれるかというと、相手の事情や状況によって無理なことも多いわけです。ですから煩惱は身を煩わし、心を悩ましますけれども、身を煩わされ悩まされるのは嫌だと、それを減らしたいというのも我々

人間の煩惱なんです。だから、そういう意味では、「適度な煩惱」、そして「相手を傷つけない程度の煩惱」と「倫理観」のバランスをとって、そして見事な身と心となって人間が完成されていくと、そういうことを考えるわけですが、人間というのはそんなふうにはなっていないのです。人生というのは、そういう自分の希望や思いを実現する場だと思っているかもしれないけれども、そうではないんだと。自分の希望や思いが実現して今があるのではない。我々はさまざまな業縁によって、より起ってきた今を私としていているんだと。だから人生というのは、より起ってきた私を、私としてきちんといたっていて、認めて、私に出遇っていく場所だ。自分や自分の思いを実現していく場所にはなっていないのです。ところが、私たちは自分の思いや希望を実現していく場所だと思ってしまう。そういうかたちで、世というものをつくっていくから、力づくになる。

そういうことに、娑婆世界王であったその人が気づいて、「そうじやなかつたんだ」ということでその娑婆世界を棄てて、改めて「世を超えたもの」に出遇って「世を問う者」になった。そういうことだと思えます。

更に釈尊は、そういった人間の世の「五悪」というものの背景に「三毒」という問題を見ていかれます。三毒とは「貪欲」「瞋恚」「愚痴」ですが、

然るに世人、薄俗にして共に不急の事を諍う。この劇悪極苦の中に於いて身の営務を勤めて、もって自らを給済す。尊もなく卑もなし。貧もなく富もなし。少長男女共に銭財を憂う。有無同然なり。憂思適に等し。屏営愁苦して、念いを累ね慮りを積みて、心のために走せ使いて、安き時あることなし。(略)時に得ること能わず。思想して益なし。心身俱に勞れて坐起安からず。

『無量寿経』下巻三毒段 聖典58頁

自分の高い者も卑しい者も、貧しい者も富める者も、そして若い者も年長者も、男性も女性もみんな錢財を憂う。結局自分の身を養うための経済、財産を憂うということです。「有無同然なり」というのは、たくさん経済的なものを持っている者も持っていない者も同じだと。憂い、悩みを持っている。どっちみち悩むならあつて悩みたいと思いませんけれども、それは人間のことです。仏さまからしたら同じだと。結局、どうやったら増えるか、ちゃんと増えるか、将来は大丈夫だろうかという、自分の身を安らげるために走り回っている。

いつもいうように、わたしたちの人生というのは、準備とか段取りに費やされるわけです。子どもが三歳ぐらいになるとダイレクトメールが来て、「お宅のお子さんは三歳で決まります。今から英語をしつかりやりましょう」とか、色々なことを言われる。保育園や幼稚園は、小学校へ上がるための準備、小学校は、中学校へ上がるための準備。中学は高校へ行くための準備。高校は大学を受けるための準備。大学に入って、昔は大学生はほとんど遊び人だったと思いますが、今の大学生は遊びません。就職が厳しいですし、大学の方も「ちゃんと学生を教育した」ということと就職の実績がなければ大学のランクが下がって入学者も減り、補助金も減らされますから、今は大学生は勉強します。就職して会社で働けるように準備をさせて、そして会社で働けるようになる。今度は結婚です。結婚の準備をして、結婚して子どもが生まれ、三歳になると、また「お子さんは三歳で決まります」というダイレクトメールが来て、また子どもの準備にずっと付き合っています。ようやく子どもが就職する頃になると、自分も定年になる。定年後の準備をし、その後の準備をし、最後にお墓や葬式の準備もする。最近「墓じまい」とか何とかいうことを、テレビで散々やるものです

から、いっぱいお寺にも問い合わせがあります。そういうものに世の中があおられながら、来年のため、十年後のため、二十年後のためと、ずっと先を見て走り回って、色々準備に費やして、結局何が本番だったのか分からないことに気がついて終わります。そういうことです。この「走せ使う」というのは。

次は「瞋恚」ですね。瞋恚は「怒り」という意味ですけれども、瞋恚の「瞋」は目へんですから、これは「目をむいて怒る」という意味です。この瞋恚の瞋は。恚というのも「怒り」です。

ある時には心に諍いて恚怒するところあり。今世の恨みの意、微し相憎嫉すれば、後世には転た劇しく大怨を成るに至る。所以は何となれば、世間の事かわるがわる相患害す。すなわちの時に急やかに相破すべからずといえども、然も毒を含み怒りを蓄え憤りを精神に結びて、自然に剋識して相離るることを得ず。

『無量寿経』下巻三毒段 聖典59頁

今の世の怨みのところとか、怒りのところというのは少しだけども、だんだん「相憎嫉」して行って、のちの世には「転た劇しく」なっていて、だんだん激しくなって「大怨」となるのだと。だから、今はちょっとした怒りかも知れないけれども、それがだんだんだんだん溜められて行って、のちの世にはどえらい怒りになってしまうのだと。何か。世間というのは、「相患害す」ですから、煩わせられたり煩わせたりすると。そういうかたちで人間関係をもっていますから、ちょっとしたことが積もり積もって、「すなわちの時に急やかに相破すべからず」。その時にすぐにカーッとなくなって怒るわけではないけれども、「然も毒を含み怒りを蓄え憤りを精神に結びて、自然に剋識して相離るることを得ず」。だんだん、だんだん、いろんな行き違いや面白く

ないことが溜まっていつて、だんだん、怒りのところが膨らんで、憤りや恨みでこころが凝り固まってしまふ。そして、そこからもう離れることができなくなつてしまひ、「みな当に対生してかわるがわるの相報復すべし」。報復し合うことになる。怒りを蓄えて、人間の歴史は怒りの歴史を担ってきた。そして怒りは怒りをよび、もう果てしない争いになっていく。だから、今あつたことだけで怒っているわけではないんですね。ずっと前のことから、溜まりに溜まったものが爆発して怒るわけです。今、カッとなつて怒るのは、大体一端はおさまりません。しかし、怒りというのは蓄えられて増幅していくもので、人間の歴史というのは怒りの歴史になつてしまつた。家族とか、夫婦でも同じですよ。だいたい怒られる時は、結婚前あたりのことから順番に「あの時はあつた、この時こうだつた」つて、結婚前のところから順番に言われて、怒られるわけです。そんな過去のこととは、こちらはずっかり忘れていきますから、「よく覚えていませんね」なんて言つたら大変なことになるますから、黙つて「すみません、すみません」と言つていきますけれども、嫌な思いをさせた方は忘れているんです。人間は都合の悪いことはすぐに忘れるんです。だから、アジアの国々にしたことも、都合が悪いことですから、そのまま忘れようとしていし、忘れるんです。ところが、された側は忘れませんし、増幅していきます。そして、言われて、そうだったのかなと思つて謝りますが、「いつまで謝ればいいんだろう」とやつぱり思うわけです。日本も、「いつまで謝ればいいんだ」と言いだすわけです。そういうかたちで、個人も国家も、その歴史が怒りの中でつくられていってしまう。これが「嗔恚」ということです。そういうものが世をつくり、その世に生まれて世に育てられて、その中に巻き込まれていきます。

「愚痴」もそうです。愚痴は、

道徳を識らず。身愚かに神聞く、心塞り意閉じて、死生の趣、善悪の道、自ら見るに能わず。語る者あることなし。吉凶禍福、競いておのおのこれを作す。一も怪しむものなきなり。(中略)

教語開導すれどもこれを信ずる者は少なし。ここを生死流転し、休止することあることなし。かくのごときの人、瞋冥抵突して経法を信ぜず。心に遠く慮りなし。おのおの意を快くせんと欲えり。

『無量寿経』下巻三毒段 聖典61頁

「教語開導すれどもこれを信ずる者は少なし」。教えが説かれても誰も信じない。「ここを生死流転し、休止することあることなし」。ずっと同じようなことを繰り返している。繰り返すようになっていく。「かくのごときの人、瞋冥抵突して経法を信ぜず。心に遠く慮りなし。おのおの意を快くせんと欲えり」と。自分の快適さだけを考へて、「心に遠く」、全体のことや、古い長い歴史のことについて慮ることが全くない。今ここが心地よければいい。今さえ、自分だけ、お金だけ、そういうふうには、我々はとらわれている。つまり愚痴というものは、単なる言葉で愚痴るというのではなくて、愚痴の「痴」という字は、異常なほどものごとに取りつかれて、夢中になつて繰り返すということ。だから、やっていること全体が見えないし、やっていることの恐ろしさを感じなくなつてくる。繰り返すわけです。

1945年に、7月に、アメリカの砂漠で核実験に成功して原爆をつくりまふ。そして翌月の8月に、日本で広島と長崎で使う。大変なことになつたことが分かつているわけです。でも、もうその7年後の1952年には水爆をつくりまふ。翌年の1953年にはソ連もつくつたと発表します。そこから二つの国の核兵器の持ち合い競争が始まります。相手に使わせないために、力で押さえつけるために、こちらも力を用意する、抑止力ということを考えるわけです。相手よりも1

発でも持てば、相手は使えないだろうと、結局、相手が150発持てばこっちは200発持つ。向こうが200発持ったなら、こっちは300発だと言いながら増やしていつて、最終的に、アメリカは3万2千発、ソ連が4万発持ったと言われています。これだけの核兵器があれば、この地球上の生命を5回は殺せるといえます。もう、相手に使わせないために、平和のためにと言いながら、夢中になって核兵器をつくって、地球上の生命を5回は殺せるほどつくってしまった。まさに「愚痴」です。愚痴ってそういうことですよ。異常なほどものごとに夢中になって繰り返す、そういう我々のあり方が、世をつくるわけです。それが人間のやることです。

ですから、「その世に生まれ、世に育てられ、世に生きる者みんなが、そのことに目を覚ますしかないんだ、目を覚ましてほしい」というのが本願です。しかし私たちは、個人的に、心と身が落ち着いて満足できるという救い、適度な欲望と適度な倫理観の中で、バランスがよく、そして周りからも「いいひと」と言われる、そんな「日ごろのこころ」のうえに「救済」を考えています。それは自己満足です。そういう自己そのものが問われ、その自己そのものが生まれ、育ち、つくっているこの世そのものが問われる、それが本願の教えです。だから、法蔵比丘は、「大変なことをしていた」ということに目覚め気がつき、自分一人この世をやめて、どっかいとこへ行くというのではなくて、そういう世に生まれ、その世に育てられ、その世をつくっている、あらゆる人がそのことに気がつかなければならぬんだ、ということでも本願を建てられたわけです。

「雑行である」と、課題をいただく

「そのままがいいのか、今の世・この私

そして、最後に「時なり」とあります。そういう本願というものを

世に問う時が来たんだと。

仏に白して言さく、「世尊、我すでに莊嚴仏土の清浄の行を撰取しつ」と。仏、比丘に告げたまわく、「汝、今説くべし。宜しく知るべし。これ時なり。一切の大衆を發起し悦可せしめよ。」

〔無量寿経〕上巻三毒段 聖典15頁

法蔵比丘が世自在王仏に言ったと。「世尊、我すでに莊嚴仏土の清浄の行を撰取しつ」。どういうかたちで浄土の本願の教えを説き開くのか、どう本願を表現するのか。その本願を選びましたといった時に、「仏、比丘に告げたまわく、『汝、今説くべし。宜しく知るべし。これ時なり。一切の大衆を發起し悦可せしめよ』と。世自在王仏が法蔵比丘に、「今こそ、あらゆる人が目を覚ますために説くべき時だ」とおっしゃって、その促しによって本願が説かれた。

我々は、その本願の教えに帰した時、世をつくり、世を育て、迷いの世を繰り返しているその発想の雑行が、「本願に帰す」ということによって、ひるがえされるとか、離れるとか、棄てるというかたちで、自分たちがやっていることが「まさに雑行ではないのか」と問題となり、課題となって明らかとなってくる。そのことを親鸞聖人は「雑行を棄てて」とおっしゃっているのだと思います。

そういう意味では、まさに「雑行を棄てて本願に帰す」ということは、「このままでいいのか、今の世・この私」ということが、はっきりと課題としていただけてくるということだと思います。そういうテーマだと、私は思っています。ですから、「雑行を棄てて本願に帰す」ということは、そのまま本願が説かれたいわれに従うならば、「この世」と「この私」、「この身」が「何をしているんだ」というかたちで初めて問題になり、課題となって見えてくる。そういうことなんだと

思います。そのことを、きちんと『大経』を確認し、そのことをベースに、親鸞聖人は我々に語っておつてくださるんだと思います。

座談会

上清水 これまで単なる御遠忌のテーマだと思ってきましたが、深いところまでは考えてきませんでした。それでも、今日お話を聞いて思ったのですが、問うということは日常生活の中にあつたと思つていきます。ただそれを言葉として伝えられていないところはあつた。

私はオーガニック野菜をやっていますが、今日の農業では農薬を使わなければならぬ、そういう方々とどう一緒に考えていけるのか。私の中には問うということのイメージはあるが、周りの人とどうそのことを共有していくのかということの難しさを感じています。

白川悟 闘争・戦争・差別、よく社会問題といわれますが、どこか自分とは切り離してしまう感覚がある。日常生活までおりてくるということが問われてくるべきだと思います。

司会（帰雲） 「今の世」と「この私」が切り離されているということですね。

白川悟 戦争、差別というのは無関係ではありませんが、もっと教えと身近な生活が結びつくような言葉が出てこればいいなと思います。ああこんなこともそうだったのかと頷ける言葉です。どこかに日常生活とい

うことが入ってこればと思います。たとえば、お内仏を中心とした生活もありますし、真宗門徒の生活ということですね。

「私と決して無関係ではなく、」の点の間に、「お内仏に向かうことよつて、われわれの日常生活や在りかた・・・」というようなニアンスがあつてもよくないかと思えます。

司会（帰雲） 日常生活ということ、どこで問われていくのかということもありますし。

みなさん、どんな御遠忌を迎えたいのかということからでもよろしいです。

四衢 テーマの成り立ちについて、「雑行を棄てて本願に帰す」ということと「このままでいいのか、今の世・この私」ということがどこでつながるのかはつきりしないということでしたので、今日は「本願が開かれてくる起点というものが世とか私を問うものだ」ということを確認したのですが、パンフレットの「雑行を棄てて本願に帰す」という親鸞聖人の決断は、決して自分が思い描いた理想を実現したというような到達点を表す言葉ではありません。如来本願から問われ続け新しく歩み出せる転換点の言葉です。同時に、・・・」

社会問題という形があるので難しいという話もありましたけれども、私、この世と私を問うのではないんです。教え、本願が私を問うんです。そこに身を据えたときに何を問題とし課題とするのかは一人一人の問題だと思えます。教えからの問いかけに身を据えるということが、一人一人の真宗門徒の日常生活の中に始まるのか。そのことを最後の二段のところで整理しているのだと思います。

「雑行を棄てて本願に帰す」ということができたからおしまいではなく、そのことが、この世とこの私が問われるということの始まりなんだとい

う言い方ですね。そういう始まりを、私たち一人一人が確かめることができるのがこのテーマの意味だと思います。

司会（帰雲） この趣旨文をまた出していくということですか。

駐在 これをベースに、時期的な抑えの部分などの対応をして、今日の課題など入れていければ、大幅な改訂はしないほうがいいかと思えます。企画検討会で話し合ってもらいたいと思えます。

「世の問い」の難しいと思ったのは、知花さんが沖繩の差別は構造差別の問題だといわれているが、自分のこととして受け取りにくい。ポーとしていて内から湧いてくるということはないので、聞法の中からしか自分自身の問題や社会の問題が見えてこないのではないかと。

司会（帰雲） 今の言葉で、自分の問いにならないということが照らされてくる。問題になってこないことが照らし出されるということかと思えました。

窪田純 「報恩講の衰退」と「伝える、伝わる」ということが御遠忌のテーマとして見えてきたことですが、このこととリンクして考えていくことも必要ではないかと思えます。

三木 御遠忌の趣旨として掲げられたこと、窪田君の今の話を踏まえるのと、この文章をちよつと変えたらいいというものではないと思えます。大幅な改訂が必要だと思えます。

駐在 通常の教化事業の中で考えたらよいのでは。江馬さんが中期計画

ということを言われていましたが、そういったところで考えたらと思えます。

三枝 準備と段取りといった、結果を求めていく信仰ではなく「問われていく」という信仰の形に目覚めていくということが、この飛驒の地に開かれていくことがこのテーマに込められた一つの願いだと思う。

そこには、仏事ということの在り方も、先祖供養や何かを成し遂げることの祈りごとであったりするものから、報恩講という質の仏事に転換していくということの視点も無関係ではないのかと思えます。仏事の在り方がそのまま信仰の在り方として表現されている。

問われてくるという信仰の在り方として、報恩講ではお浸いとか改悔批判というものが歴史としてあったのではないかと、私たちはそういったものを伝えるということをしてきたのかということが問われてくるということも含めて、別の問題ではないと思えます。

白川悟 テーマと基本理念の違いがよくわからないのですが。

駐在 テーマは「課題」で、基本理念は「勤めることの意義」だと思います。テーマは問いかけなので目標値を示さない。本山からはサブテーマかスローガンを立てるように言われたと思えます。

三枝 テーマについて、言葉だけ出してそれで終わりにするのか。テーマについて深め広めていくような取り組みをしていくのかどうなのか。

上清水 「このままでいいのか」ということですが、答えが出た瞬間に次のものを求めていくということになると、結局答えというものはないのではないかと思います。「今の世」というのはいつの世も問われている

のであれば、各教化委員会がその時代から問われてくる課題に向かっていくということではないかと思えます。

三枝 テーマについて、これからも意見を交わしていく場を持たなければいけないということを前提として、趣旨文も出していかなければいけないとは思いますが、最終的な決定版を今作りましょうということでもなくともよいかと思えます。そういう意味でも、すでに出ている趣旨文を若干変更し、付け加えをして出すという方法もあるかと思えます。しかし、それでそのまま止まらないということ。

岩佐 この文章の合わないところはどなか探したらいいと思えます。この文章はいつでも成り立つと思えます。みんな、自分勝手な闘争であり、自分勝手な戦争反対なんです。子供が言ったら困るとか。これをいじることはできないと思えます。もう一つ別に洗いなおしたものを作るとか。

だから、この「生み出す」ということが分からないんですよ。

司会（帰雲） これは、テーマは出された時の願いですから、これを変えてしまうということはないと思えます。ですから、これをそのまま受けて、どういう御遠忌にしていくのかは別建てなのかと思えます。

駐在 年代なんかは変える程度にして、ここから出てくる問題というのは何らかの形で出すということでしょうか。

企画検討会で、今後どう対応していくのか、呼びかけのこともありますし。

司会（帰雲） それでは、お話しいただいた内容について企画検討会で、

検討させていただくということでもよろしいでしょうか。

四衢 東日本大震災を経て、いろんな状況が様変わりしますので、テーマはこのままいくとしても、私たちの視点としても作り変えるということがあってもいいかと思えます。

それと、報恩講とか伝える伝わるというのは教化のコンセプトですね。着眼点ですね。それはそれで、新たな文章を作る中で、どうテーマとリンクしていくのか、そういったところも企画検討会議で確認していただければと思います。

(丁)